

三〇一 収容所での思い出

長野県 山崎 孝

いつの頃からか収容所のすぐ横にある小高い山を二人一組で井戸掘りの仕事をした。直径は約一・五メートルで、掘り進むうち岩盤となり、ノミで岩に穴をあけ、そこへロシア人の技師がダイナマイトを詰め、掘り上げた岩石を埋め戻し爆破する。穴の中の一人が上から降ろした籠に岩石を入れ、上の一人が滑車で引き上げる。これを何回も繰り返し十メートルくらいまで掘り下げ、最後はたくさんのダイナマイトを入れ、掘り下げた岩石を全部埋め戻した。

慣れない仕事と食糧事情もよくなかったし、怪我に怯えた毎日だった。このような井戸はかなりな数だったし山の麓では横に並んで横穴が掘られ、最後は奥にたくさんのダイナマイトが仕掛け

られた。我々と現地ロシア人は一キロメートルくらい避難して、全山一斉に爆破した。

すぐロシア人による電気シャベルがきて、蟻のようにトラックが崩した岩石を積んで収容所前のツンドラ地帯へ運んで空け、運んでは空けて五、六メートルの高さに路盤を奥地へと延ばしてゆく。

次は収容所からどのくらい離れていたか巾十メートルくらいの川に鉄橋を架ける仕事となつて、大きな杭を川の中に何本も打ち込み水平に切つて、その上を枠作り。鉄橋で組んだ中へセメントを流し込む作業は、かなり重労働だった。三交替で夜間など零下四〇度くらいもあったと思う中をロシア人が練ったセメントを鉄輪の一輪車で四十センチメートル巾くらいの板を二十メートルほど登って枠上から空けるのだが、ロシア人はセメントをたくさん入れるので登り板で垂れて凍るため車がよく回らず、止まれば落下で命がけだった。夜間の場合は早く三ツ星（オリオン）が西へ

動いて交替の来る八時間後をどれだけ待ったことか。

続いて三〇四収容所の方だと思いが線路の枕木作りもかなりきつかった。ロシアの線路は幅広く枕木も長いはず、何十キログラムの重い物だったかも知れない。作業終了の時は抜けそうな腕と腰の痛みを味わったものだ。

私は大工作業隊だったので駅の建築となった。細かいことは忘れたが約一年かかって二階建ての物だった。

エボロン駅という大きな駅で多くの仲間と働いた。また夜間は交替で不寝番もした。この時は労働ではないので昼間作業した者が夕方収容所へ帰ると一人になり、暮色迫った黄昏の空を見て、フト、いつ日本に帰れるのか感傷におぼれたこともあった。そして

昔の夢のなつかしく 尋ね来たりし信濃路の
山よ小川よまた森よ 姿昔のままなれど……
と、いつしか口ずさんでいた。

シベリア抑留の思い出

新潟県 小 林 福 次

昭和二十（一九四五）年一月新発田に召集された。二十年終戦の時はトモンで迎えてソ連軍に抑留された。

三〇一収容所に収容された二十一年ころは食べる物もなく、ビタミン不足等で皆さん歩くことすらままならず、草原を歩く自分の足を取られ転倒するありさまでした。これではと皆で考え松の木の葉を叩いて青汁を造り、皆で飲み頑張りあったことが思い出されました。二十一年ころ、隣の収容所は三〇四で千人くらいの内、病氣その他で百人くらいの戦友が亡くなられ、亡くなられたら毎日遺体を埋める穴掘りとの情報で、戦友としてご冥福をお祈りします。

自分たちの部屋が寒いので薪割り等での毎日